仮面ライダークウガ in D.C.2

SMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダークウガ　ｉｎ　Ｄ．Ｃ．２

【Ｎコード】
Ｎ３４５７Ｖ

【作者名】
ＳＭＲ

【あらすじ】
仮面ライダークウガとＤ．Ｃ．２のコラボ小説です。二時創作と言った類が苦手な人はご遠慮下さい。なおこの作品は原作をある程度は知らないと分かりにくい部分が多々あります。
初投稿故にお見苦しい所も多く有りますがどうぞよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

プロローグ

今、彼の目の前に今にも車に引かれそうな子供がいる。
小さな女の子だ。
彼はとっさに飛び出し、女の子を道路の外に突き飛ばす。
女の子は助かったが彼はそうはいかなかった。
車に跳ね飛ばされ、地面に叩きつけられる。
彼の視界はぐにゃりと歪み、次第に意識が遠のいてゆく。側で女の子が泣き叫ぶ中、彼は絶命した。

しかし、彼は再び目を覚ました。辺り一面真っ白な空間だった。
すると、彼の前に若い女性が立っていた。
「あなたは誰ですか？」彼は尋ねる。
「私は次元の監視者です。あなたにお願いがあってあなたをこの次元に呼んだのです。」
彼女は答える。
「ちょっと待って下さい。呼んだってどういうことですか？第一ここはどこなんですか？」
「ここは次元の狭間て〝す。あなたはあなたの世界で絶命しました。だから私があなたを呼ぶことが出来たのです。」
彼とは対照的に彼女は落ち着いた様子で答える彼はようやく自分がしんだことを理解する。「今、ある世界に歪みが生じ、危機に瀕しようとしています。あなたにその世界を救って欲しいんです。仮面ライダークウガとして！」
「ちょっと待って下さい。仮面ライダーはテレビの中のことじゃないんですか？」
「あなたの世界ではそうですが、そうでない世界もあなたの世界の外の次元にはあります。」
彼は絶句した。しかし、彼の目にはさっきとは違う力強さがある。

「今、本来仮面ライダーがいない世界が何者かに歪められ、それに近い世界になろうとしています。しかし、その世界には仮面ライダーがいません。だから、あなたにはその世界で仮面ライダーとなり、その世界を救って欲しいんです。」
「分かりました。オレにやらせて下さい。どうせ死んだんなら何かの役に立ちたい。でも最後に１つだけ、なんでオレなんですか？」
「１つはあなたが死んだからですが、もう１つはあなたが優しい心を持った人間だからです。クウガには優しい心を持った人間しかなれません。」彼は驚いた。今まで自分が優しいと思ったことなどなかったからだ。
それから、彼女は彼の腰に中央に大きな石が埋め込まれたベルトのような物をつける。すると、それは彼の中に吸い込まれた。
「これであなたは仮面ライダークウガです。私も出来る限りのサポートはしますが、それにも限界があります。後はあなた次第です。」
「分かりました。行って来ます。」
そう答えると彼の視界は光に包まれ、再び意識を失った。

第一話（前書き）

お待たせしました
第一話です

第一話

彼が目を覚ますとそこはすでに別の世界だった。至る所に桜が咲いている。
彼は自分の脇に見たことがないバイクと小さなバッグがあることに気づいた。
そのバッグを開けてみるとカギと手紙と携帯電話が同封されていた。
手紙にはこう書かれていた。
「あなたが今いる場所はD．C．2の世界です。あなたの世界にそういうゲームがあるのは知りませんか？この世界は1年中桜が咲いている島だったそうですが、今はそうではないそうです。どこかで必ず異変が起きます。調査してください。
この世界でのあなたの家は用意しました。地図も一緒に同封しておきました。あなたは風見学園の2年生として編入することになっています。それまでに準備をしておいて下さい。編入は3日後です。
あなたの生活に必要な物はこちらで用意しました。携帯電話はその1つです。
それからあなた専用のバイクを用意しました。トライチェイサーと言います。お使いください。
免許も同封しておきました。こちらの調べではあなたは生前もバイクを所有していたそうですね。使えるはずです。
ではお気をつけて」
彼はD．C．2をまったく知らなかった。それに仮面ライダークウガについても昔見たことがあったが完璧に覚えているわけではない。
「まずは家に行ってみるか。」
そう言って彼はこの世界での自分の家に向けてトライチェイサーを走らせた。
家に着き、中に入ってみるとタンスやテーブル、冷蔵庫といった家具は問題なく揃っており、テーブルには預金通帳が置かれていた。

生活に問題のなさそうな額は記載されていた。
それから彼は家の中のことを一通り確認し終えると、再びトライチェイサーに乗り、外に出て行った。
外に出てみても特にこれといった異常は見られない。
彼はこれから自分が通う風見学園に挨拶に行くことにした。風見学園の近くまで来たところで流石にバイクで学園内に乗り入れるのはマズいだろうと思い、近くにバイクをとめてから入ることにした。

学園内に入ると、彼はたくさんの視線を感じた。ちょうど下校時間だったようで、生徒達も外にたくさんいたのだ。

来客者用の受付と思われる場所に向かい、編入前の挨拶に来た旨を伝えると、係員の人に名前を尋ねられた。
すぐには名前が出てこない。生前の自分の名前が思い出せないのだ。
とっさに用意された家にあった編入書類に目を走らせる。そこには五代（ごだい）優（ゆう）と書かれていた。
すぐにその名前を言うと、係員に少し怪しむよう視線を向けられたが、すぐに通して貰えた。
それから、学園長室へと向かう。
学園長室の前に到着し、優は、一度大きく深呼吸をしてからドアをノックし、「失礼します。」と言って中に入る。
するとそこは和室であった。一瞬、部屋を間違ったかと思ったが、奥に人がいた。しかし、その人は学園長であるようには見えない。
その人は金髪のキレイな髪をしている小さな女の子だった。
「この度風見学園に編入することになりました五代優です。学園長はいらっしゃいますか。」と彼女に尋ねる。すると彼女は「ボクが風見学園の学園長の芳乃さくらだよ。」と答える。
優は何だか話が飲み込めず、「学園長のお孫さんか何かですか？」と尋ねる。
すると、さくらは「だからボクが学園長だって。」と笑顔で答える。

このようなやりとりが何度か続いて、優はようやく彼女が学園長であると信じることが出来た。
「本当に学園長でしたか。すいません。あまりにもお若く見えたもので」優は慌てて謝罪する。
さくらは少し膨れたような顔をしていたが、それもすぐに笑顔に変わり、「ニャハハ。気にしてないよ。ようこそ。風見学園へ。」と言った。
「でも学園長のお孫さんですかはないよねー。」とイタズラっぽい顔をする。
「ハハ、すいません」
優はまた謝る。
「優君は本校の2年生に編入だね。早く慣れるといいね。高校生活は一生に一度だけだからね」
そんなやりとりが続き、優はさくらとすっかり話し込んでしまった。
さくらの人柄もあったがすぐに打ち解けることが出来た。優はこの世界に来てから初めての知り合いが出来たことを嬉しく思った。
話し込んでいるうちにすっかり日が暮れてしまった。
「優君って島のどの辺に住んでるの？」
さくらが優に尋ねる。
優は自分の家の場所をさくらに伝える。すると、「なんだうちの近くだね。一緒に帰ろうよ。」と言った。
「いいですよ。」優は快く了解する。
さくらと一緒に風見学園を出ると優はトライチェイサーに乗って来ていたのを思い出し、取りに行った。
「優君ってバイクのれるんだ。変わったバイクだね。」と興味深そうに言う。
優が乗りますか？と尋ねると、すぐに嬉しそうな返事が返って来た。
こういうところも年上に見えないと優は内心思う。
さくらを乗せ、自宅の方に向かっていると、さくらがバイクを止めるように言うのでトライチェイサーを止めて降りると古い木造の大

きな家の前だった。芳乃と表札に書かれている。
「もうすぐ夕ご飯だから食べてってよ。家帰っても一人なんでしょ。」
優は最初は遠慮していたが、さくらに半ば強引に家の中に入れられ、気が引けるが上がって行くことにした。
さくらがただいまと言うと返事が返ってくる。
どうやら他にも人がいるようだと優は思った。
おじゃましますと言って中に入ると今には3人の男女がいた。
男の子が1人女の子が2人だ。
2人は自分と同じくらいだが、もう1人はさくらと見た目の年齢が大差ないように思える。アッシュブロンドのキレイな銀色の髪でお人形さんのような顔だちだった。
初めまして五代優です。と自己紹介をすると3人も自己紹介をしてくる。男の子の名前は桜内義之と名乗った。サッパリとした印象で好青年といった感じだ。
さっきのお人形さんのような顔の少女はアイシアと名乗った。さっきの桜内義之君とは恋人同士だそうだ。
もう1人の女の子は頭にお団子を作っている。
朝倉由夢と名乗った。
桜内義之君とは兄妹のような関係らしい。そして彼女には3つ年上の実の姉がいるのだが、今はロンドンに留学していていないらしい。
みんな学校から帰って来たばかりらしく制服姿だった。買い物にでも行っていたのだろう。
それからすぐに夕食になり、みんなと楽しく談笑しながら食べた。
幸せそうな人達だと優は思った。
さくらが義之にくっちいたり抱きついたりして、ちょっかいを出すとそれを見たアイシアが怒る。それを由夢が呆れたような様子で見ている。だが、みんなどこか楽しそうだった。
そんな中さくらが口を開く。
「優君は何か特技とかってある。」

優が少し考えて真っ先に浮かんだのは与えられたクウガへの変身能力であった。一瞬それを言いかけたが、すぐに、こんなことを言っても頭のおかしい人間だと思われると考え直し、
「やっぱりバイクですかね。」と答えた。するとアイシアは
「へー五代君ってバイク乗れるんだ。義之君も免許とったら?」と笑顔で言った。
義之は「この島にいる分には不便はないし、俺はいいかな。」と言った。すると由夢が「必要どうこう以前に兄さんは免許とれるか怪しいですしね。」とバカにしたように言う。
そんな中優はさくらの表情が突然険しいものに変わったことに気づいた。「学園の用事があるの思い出したからちょっと行ってくるね。」と言って席を立ち出掛けて行った。
妙な胸騒ぎを感じた優はその後を追うことにした。
「オレもそろそろ帰りますね。今日はどうもありがとう。」言った。
ゆっくりしていけばいいのにと言うが、それを断って外に出る

さくらは急いでいた。さっき、以前に枯れない桜が暴走していたときのような感覚がした。
そうして枯れない桜があった場所に着くと枯れない桜は満開で咲いていた。それが夜の漆黒の闇と相まって少し不気味だった。
するとさくらは桜の木のそばに女の子が1人いるのに気づいた。
それはさくらもよく知る人物で、風見学園のアイドルと言われる白河ななかだった。ルックスやその歌声、その人懐っこさもあって男子から人気がある。以前は桜の木から得た、人の心を読む力を持っていたが桜が枯れることでその力を失ってしまった。
だからこそ自分の力が戻っていることに気づいて桜より先にまた枯れない桜が咲いているのに気づいたのだろう。
さくらが遠くからそれを見ていると茂みの中から人影が現れた。だがよく見るとそれは人ではなかった。蜘のような顔をした人型の怪

物だった。それがだんだんとななかの方に近づいて行く。
彼女は悲鳴をあげ、その場にへたり込んでしまう。彼女は恐怖のあまりそこから動けなかった。

優はさくらのあとを追い、枯れない桜があったと教えられていた場所に着いていた。
すると近くから女の子の悲鳴が聞こえて来た。声のする方に行くと怪物が女の子を今にも襲おうとしているのが見えた。
優は自分の腹に手を置き、アークルを出現させ、変身ポーズをとって「変身」と叫んだする。すると彼の体が変化していき、白の体のクウガグローイングフォームへと姿を変えた。
自分の体を見て優は少し驚いたが、違和感も覚えた。自分昔見た仮面ライダークウガは赤色だったような気がしたからだ。しかし、今はそんなことを言っている場合ではないのですぐに気持ちを切り替え、怪物の方に向かって行き、それを殴りつけた。

ななかを助けなければと思いさくらは近くに行こうとしたが、少し間に合わないような気がしていた。
そのとき遠くからもう1つの人影が見えた。それも人間ではなく、短い角と赤い大きな目を持つ白い姿の、人ではないものだった。
もう駄目かと思ったが、それは蜘の怪物を殴りつけたのだ。

優は焦っていた。自分の中ではクウガに変身した自分は敵と互角以上、むしろ圧倒的な力で戦えると思っていたが、そうではなく、少し相手に圧されていた。
そうしているうちに自分のパンチがかわされ、胸に強力な一撃を食らわされた。

激しい痛みを感じたが優はなんとか立ち上がり、怪物に渾身の力でキックを叩き込む。怪物はダメージを受けたのかその場から退却していった。
優にとっては逃がしたというよりむしろ逃げてくれて助かったという感じだった。あのまま戦っても勝てなかっただろうと優は思う。
なにはともあれ優は襲われていた女の子を助け起こそうと手を伸ばした。だが彼女の顔は恐怖に歪んでいて、優（クウガ）の手を払いのけ走り去って行ってしまう。
優はただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

第一話（後書き）

クウガに変身させるために少し長くなっていまいました。
無理やりな部分も多かったと思いますが、少しでも楽しんで頂けたら幸いです。
次の投稿はいつになるか分かりませんが宜しくお願いします。

第2話（前書き）

第2話です。

第2話

さくらはただ見ていることしか出来なかった。
白い方が蜘の怪物を撃退した後、ななかの方に近づいていくと、ななかはその手を払いのけ逃げて行った。
そのときのそれがなんだか悲しそうに見えたのだ。
自分の思い過ごしなのかもしれないとさくらは思った。ただ蜘の怪物の方を逃がした後、標的を変え、それに逃げられたからだけかもしれない。

雨が降ってきた。雨の勢いは強い。しかし、それはまだその場に立っている。雨粒がそれの顔をつたって落ちる。それの赤い大きな目をつたって落ちる雨粒はそれの涙のようにも見える。
しばらくすると、それの姿が一瞬にして変わり、人間の姿になる。
「えっ！」さくらは驚いた。それが自分の知っている人間、五代優だったからだ。
そのあと優はゆっくりとその場を立ち去って行く。
引き止めようかと思ったが、今彼に何を言っていいか分からず、そのまま見ているしかなかった。雨足は次第に強まる。
さくらはすぐに枯れない桜のことを思い出し、すぐにそれを枯らそうとした。
しかし、枯れない桜はいくら枯らそうとしても全く枯れない。さくらを全く受け付けないのだ。
「どうしたらいいの？」さくらは膝をついた。
その後何度も枯らそうとしたが、結果は同じだった。
さくらは思い足取りで帰路につく。
芳乃家に着くと義之とアイシアが出迎えてくれた。
「さくらさん。どうしたんですか？遅かったじゃないですかそれにずぶ濡れだし。」

「そうだよさくら。どうしたの？」
義之とアイシアが尋ねる。
さくらは2人を心配させてはいけないと思い
「何でもないよ。もっと早く終わると思ったんだけど仕事が長引いちゃって。それに途中で雨も降って来ちゃってさ。大変だったよー。」とさくらは何とか笑顔を作って言った。
すると義之がタオルを持ってくる。
自分にはこうして暖かく迎えてくれる家族がいるが、優には居ない。
あの後彼はどうしたのだろうとさくらは思った。夜が明ける。昨日の夜からの雨はやんだようだ。しかし、優の心はそうではなかった。
どうやって昨日、家まで帰ったのかよく覚えていない。ずっと頭の中にあったのは昨日の出来事のことだった。
よくよく考えて見ると当たり前のことだと優は思った。自分の世界で見れば違うかもしれないが、クウガのことを何もしらない人から見たら自分もあの怪物と変わらないのかもしれない。決してあの子が悪いわけではない。そう考えて、優は頭の中で合理化しようとするが、気持ちはいっこうに晴れなかった。
あの蜘の怪人さえ倒せれば自分はこの葛藤から抜け出せるかもしれない。そんな淡い期待だけが彼を突き動かし、彼は周囲の調査に出た。
トライチェイサーに乗り辺りを闇雲に走る。調査と言ってもただそれだけだ。
昼ごろになると、朝からずっとバイクに乗っていたせいか流石に疲れを感じ、公園で休むことにした。この公園は桜公園というらしい。公園に入り、ベンチに座る。それでも頭の中に浮かぶのは昨日のことばかりだ。さっきまではあの蜘の怪物を倒せば、何かが変わると思っていたが、実際そうではないだろうと優は思った。昨日のようなことはこれから先もあるだろう。もっと酷いこともあるかもしれない。
「オレはこれからも戦っていけるのかな。」と優はつぶやいた。

すると、小さな女の子が優の方に近づいてくる。「どうしたの？」と心配そうな顔で聞いてくる。するとその女の子は
「手出して」と言う。
優はそれに従って黙って手を出すと、女の子は優の手に包みにくるまれた飴玉を置く。
「オレに？」と優が聞くと
女の子は「うん。」と笑顔で言った。
それからすぐに女の子は駆け出し、母親の方に走って行き、自分の方に手を振ってくる。優も笑顔で振り返す。
お礼を言う暇もなかった。
あの女の子は見ず知らずの自分を心配してくれたのだ。何の見返りも求めない純粋な親切心からだ。自分もそれでいいではないかと優は思った。あのときのあの子の笑顔は美しかったと思う。他人をいたわる気持ちに溢れていたからだ。同時に芳乃家の人達の笑顔も浮かんだ。あったばかりの自分を受け入れてくれた優しさは本当にありがたかった。
化け物だと思われてもいい、ただあの笑顔を守っていこう。優は決意した。

それから優は再び調査を開始する。さっきまでとは気持ちの入り方が大きく違う。ただ走りまわるのではなく、島の全体像を把握し怪人の潜んでいそうな場所を徹底的に捜した。しかし、大した手がかりもえられず、その日の調査は終わる。
家に帰ると小包が届いていた。中を開けてみると中には携帯電話のような機械と手紙が同封されていた。
どうやら例の次元の監視者からのようだ。
手紙には
「すでにグロンギの1体と交戦したようですね。今回お送りしたのはグロンギを探す機械です。
グロンギサーチャーといいます。グロンギが近くにいると反応しま

す。お役立て下さい。」と書かれていた。
これがあれば明日は見つけられるかもしれないと思った。それに明後日からは風見学園に編入になり、今日のようには動けなくなる。明日は頑張らなければならない。
優はすぐに床についた。

さくらは学園長室にいた。昨日から桜を枯らす方法とあの怪物について考えていた。しかし、何の解決策も浮かんでいなかった。優のこともそうだ。あれから1度彼の家を尋ねたのだが早朝から出掛けていたようで居なかった。
「どうしたらいいんだろう?」さくらは弱々しくそう呟いた。
さくらは外が騒がしいのに気づいた。外に出てみると大勢の生徒達が外に出ている。
見ると校舎の屋上に大きな蜘の巣のような物が張られていた。そこから人型の蜘のような顔をした怪物が現れる。
それは太い糸のような物をそれを使ってこちらにすごいスピードで降りてくる。すぐにたくさんの生徒がいるグラウンドにたどり着いた。男の先生達が棒を持ってそれを追い払おうとするが、軽くいなされ、投げ飛ばされてしまった。それを見た生徒達に一気に恐怖が伝播する。みんなパニック状態である。するとその怪物は何人かの生徒達が糸に巻かれて動きを封じられ、怪物に屋上に連れて行かれた。それを見た生徒達の混乱が一層強まる。
そんな中、さくらは混乱して身動きが取れなくなっている集団の中に義之とアイシアを見つける。2人に近づこうとすると蜘の怪物が現れ、アイシアを連れ去ってしまう。アイシアが悲鳴をあげる「アイシアっ」義之が叫んだ。アイシアは恐怖のあまり気絶してしまったようだ。
「クソっ」
義之は校舎の方に走って行った。

「義之君！」さくらは止めようと叫んだが周りの音にかき消されそれはかなわなかった。

そのころ優は風見学園の近くを走っていた。すると、グロンギサーチャーが反応する。方角は風見学園の方だった。
優はまさかと思ったが、やはりその場所は風見学園だった。
学園に着くと、中がかなり騒がしいパニックになった生徒達が逃げ惑っている。
校舎の方に目を向けると、前にとりのがした蜘の怪物がいた。生徒達を屋上に連れ去っているようだ。
優は昨日の決意を胸に、腹部に手を置き、アークルを出現させ、変身のポーズをとる。
「変身」
優の姿は変わり、クウガマイティーフォームに変身する。体色は赤くなり、角も長くなる。グローイングフォームよりも力強い印象を受ける。
「よし赤くなった。」
優は校舎に向かって行く。優が校庭の中に入って行くと何人かの生徒が悲鳴をあげた。
もうだめだと叫ぶ生徒もいた。
しかし、優はそんな校庭の中をくぐり抜け、校舎の屋上を目指していく。ジャンプでいっきに2階に登り次は3階までジャンプする。
こうして屋上に着く。
すると、すぐに蜘の怪物が襲いかかって来る。
優はその攻撃を寸でのところでかわし、パンチを打ち込む。グローイングフォームの時のパンチ力とは大きく違っていた。だが、すぐに怪人の反撃がくる。
何とかそれをいなし、反撃に転じようとすると、突然屋上の扉が開く。

義之だった。
「アイシアっ！」と叫ぶ。
それに気を取られた優は怪人の攻撃をまともに食らい、義之のいる方に飛ばされてしまう。義之は驚きと恐怖が混じった複雑な表情をしていた。
優はすぐに立ち上がったが、蜘の怪人は糸を吐いてくる。かわせない距離ではないが、自分が避ければ義之にあたると判断し、その糸を腕で受けるが、糸で縛られ、両腕の自由を失ってしまう。

屋上に着いた義之は驚いた。さっきまでは蜘の怪物しかいないと思っていたが、今は赤いのもいる。しかも　両者は争っているのだ。
今のうちにアイシアを救出しようと思ったが赤い方が自分の方に吹っ飛ばされる。
それはすぐに起き上がったが、蜘の怪物が自分達のいる方に糸を吐いてきた。とっさのことで義之は足が動かなかった。目の前の赤い方を狙ったのだろうが、赤い方がそれを避ければ自分に当たる。そう思ったが、赤い方は避けるような素振りを見せず、腕にその糸が絡まってしまう。ただの偶然かもしれないが、自分をかばったようにも見えた。

腕を使えない優は怪人の懐に飛び込もうとするが回避されその場に倒されてしまう。怪人はそこに追い討ちをかけるように優に飛びかかり、鋭い爪で喉を狙うが、優はそれを利用し、腕の糸を切り、腕で攻撃を受け止める。そのまま怪人の腹部に蹴りを打ち込み、体勢を立て直す。優は蹴りを受け、隙が出来た怪人に向かって走っていく。右足が熱くなるのを感じた。そのまま怪人に跳び蹴りを打ち込む。すると怪人の体に封印の印が浮かび、そこからベルトの装飾品に向かって亀裂が入っていく。それがベルトの装飾品に達し怪物は

爆散した。
優は捕らえられていた生徒達の方に向かっていく。
それを見た、義之が再び「アイシアっ！」と叫び、こちらに走ってくるが優はそれにかまわず、生徒達に絡みついた糸を引きちぎり、その場を立ち去ろうとするが、義之がそれを引き止める。
「待ってくれ。あんたは何者なんだ。」と言う。すると優は「クウガ」と言い、義之に向かってサムズアップをする。
優はすぐに屋上から飛び降り、トライチェイサーに跨ってその場を立ち去った。

第2話（後書き）

今回も読んで頂いてありがとうございました。
少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

次回はいつになるか分かりませんがよろしくお願いします。

第3話（前書き）

3話です。

第3話

風見学園での事件から数日が過ぎた。
あの後すぐに警察による調査が行われたが、いくら調査しても、死んだ怪人の遺体も、それがそこにいたという痕跡さえも発見されなかった。また何人かの生徒が撮影した写真にも何も写っていなかった。
島中の調査も行われたが、蜘の怪人を倒したという赤い怪人も発見されなかった。そのためこの事件は大規模な集団幻覚として処理された。

この事件のせいで優の編入は先伸ばしになっていた。
そして今日がその編入の日である。
だが優の頭の中は先日の事件のことでいっぱいだった。
「どうして何の痕跡も残らなかったんだ？」
優は呟き、時計を見る。そろそろ学園に向かわなければならない時間だった。優は家を出た。

義之は教室にいた。教室での生徒達の話題は先日の事件のことで持ちきりだった。
義之の周りにはアイシアを含む、いつものメンバーが集まっている。
「絶対幻覚なんかじゃなかったよな。」義之が口を開く。
「でも、何の痕跡も発見されなかったのは本当みたいよ。」杏が言う。
「後で調べて見たがあの怪人が吐いた糸すらも見つからなかったら

しいな。」杉並が言う。
アイシアは怪人にさらわれたこともあり、この話題に参加したくないようだ。
「でもさ、あの赤いのは何だったのかな。やっぱ正義の味方とかか？」渉は言う。
「私もそう思うかな。杏ちゃんはどう思う～？」茜が渉に同意し杏に尋ねる。
「断定は出来ないわね。ただ私達を助けたような形になっただけかもしれないしね。」杏はピシャリと言った。「オレは敵じゃないと思うな。」義之は言った。「どうしてそう思うの。」すぐに杏が尋ねる。
「オレあの赤いのに助けられたんだよ。捕まってたアイシア達の糸も切ってくれたし。」義之がそう答えると、杉並がすぐに「ほう、それは興味深いな。詳しく聞かせてくれ。」と言った。
このやりとりの中で、ななかは1度も口を開いていない。何か考えごとをしているようだ。それに気づいた義之がななかに心配したように尋ねる。「ななか、どうしたんだ？」
「えっ何？」
「いや、ずっと黙ってるからどうしたのかなと思ってさ。」
「何でもないよ。」少し慌てたように答える。
そんなやりとりをしているとアイシアが突然
「今日転校生が来るんだって。」と言った。よほど話題を変えたかたのだろう。アイシアは少し必死だった。
それにすぐ渉が食い付いた。
「女の子？」
みんな少しひいていた。杏にいたっては可哀想な物を見るような目をしていた。
「まっ渉だしね。」
「渉君だしね～」
「渉だしな」

「板橋だからな」
みんな一様に言った。
ななかはまだ何か考えているようだ。
渉は拗ねていたが、それを義之は無視して言う。「男だよ。オレもアイシアも、もう会ってる。」そう言うと、クラスに担任が入って来たので各々自分の席に戻って行く。「何人か知っている者もいるようだが、今日から新しい仲間が増える。さあ入って。」担任が促すと優が入って来て挨拶する。
「転校生の五代優です。よろしくお願いします。」すると、拍手が起こる。席は杉並の後ろになった。
昼休みになると義之とアイシアを含むメンバーが優の周りに集まってくる。
「義之、アイシアさん久しぶりだな。本当はもっと早く編入するはずだったんだけど。」
「まあ色々あったからな。」
それからみんなそれぞれ自己紹介をする。
途中で優は「杏がおもちゃが増えた。」と言ったのを聞いたが気にしないことにした。
杉並からも非公式新聞部に勧誘されたが、義之に止められたのでなんだか良く分からないが、やめておいた。
そんな中、優は枯れない桜の木のそばで助けた女の子がグループの中にいるのに気づいたが気にしなかった。

すると放送が入る。
「2年3組五代優君、至急学園長室まで来て下さい。繰り返します…」
「もう何かやらかしたの？」杏がからかうように言った。
「何もしてないよ。転校のあいさつかなんかだよ。きっと。」
「本当にそうかしら？」と言ってフフと意味深に笑う。
優は苦笑いを浮かべ、学園長室に向かう。

学園長室に入るとさくらがいた。
「待ってたよ。優君。」さくらがいつもと様子が違うのを優は感じとる。「単刀直入に言うね。あの赤い戦士は優君なんでしょ？」
優は驚いた。変身を見られていたとは思っていなかったからだ。
「僕見ちゃったんだ。君が僕の家に来た日に枯れない桜の近くで君があの怪物と戦ってるのを。君は一体何者なの？」
「ばれちゃいましたか。確かにあれはオレです。騙すつもりはなかったんですけど、みんな怖がると思って。」優がそう言うと、さくらはあのとき彼がななかに怖がられ、逃げられてしまっていたのを思い出す。
「僕はそうは思わないよ。みんなを守ってくれたんでしょ？僕は君を信じてるよ。」
「ありがとうございます。でも大丈夫です。もう決心つきましたから。みんなを守るために戦うって。」優はそう言ってサムズアップをする。
「強いんだね。君は。改めてお礼を言うよ。ありがとう。」さくらは笑顔で言う。優は少し照れくさかったが話を続ける。
「ある人からあの力を託されたんです。この世界を守れって。」
「そうなんだ。でも無理は絶対しちゃだめだよ。君は1人じゃないんだから僕を頼ってね。」
「ありがとうございます。そろそろ授業なのでオレ行きますね。」
「うん。今日はありがとう。またね。」
優は学園長室を離れる。自分のことを理解してくれる人間が出来て優は嬉しかった。」

さくらは考えていた。
あの怪物たちが枯れない桜と何か関係があるに違いないと。

「早く桜を枯らす方法を見つけないと。じゃないとずっと優君が戦い続けることになっちゃう。」さくらは焦っていた。

放課後になると杉並がみんなを集める。
「五代との交流を深めるために肝試しをやろうと思う。」
みんな面食らったような顔をする。
「なんでまだ春なのに肝試しなんだよ。第一あんなことがあった後なのに。」義之が言った。「あんな事があったからこそだ。あれを忘れるのにはちょうどいいのではないか？」杉並が言う。「また何か企んでるでしょうけど、悪くないわね。」杏は肯定的だ。
「まあ五代の参加が前提だが。どうだ五代？」
「オレは構わないよ。」優は答えた。少し気分転換にいいかもしれないと思っていた。

結局みんな参加することになった。アイシアは最後まで渋っていたが「義之君が行くなら私も行く」と言って参加することになった。
夜の８時に芳乃家の前に集合となった。

第3話（後書き）

今回は戦闘なしです。

次の投稿はいつになるか分かりませんが気長にお待ち下さい。

第４話（前書き）

４話です。

第4話

8時になり、芳乃家の前にメンバーが集合していた。1人を除いて。
「あと来てないのは杉並だけか。」義之が呟くと、
「オレなら最初からいるぞ。」と言って杉並が義之の後ろから現れる。
優はかなり驚いたが、他のメンバーはあまり驚いていない。
みんな慣れてしまっているのだろう。集まったメンバーは優、義之、杉並、渉、ななか、杏、茜、アイシアの8人だった。「よし、では出発するぞ。」杉並が言うと、
「おー」とみんなが言う。
みんななんだかんだで乗り気のようだ。
「それで結局どこに行くんだ?」義之が尋ねる。「そう言えばまだ行き先を聞いてなかったわね。」
「そうだようね。」
それに杏と茜が同調する。
「この先の森の中に古い教会がある。肝試しはそこで行う。」
「教会なんかあったけ?」ななかが尋ねる。
「いや知らねーな。義之は?」渉が尋ねる。
「いや、聞いたことないな。」
誰も知らないようだ。
優はなんだか胸騒ぎがした。

肝試しのコースとなる森に着いた。
アイシアは義之にくっついてガタガタ震えている。
「アイシア、大丈夫か?」義之が聞くと
「だだだ大丈夫に決まってるじゃない。あたしは義之君よりお姉さんなんだよ。」
アイシアは震える声で答える。

「ではルールを説明するぞ。2人1組でペアを組んで1組ずつ教会に向かってもらう。教会のなかには朝オレが置いて来たコインがある。それを持って戻って来たら肝試し終了だ。」そう杉並が告げると、「じゃあ、あたしは当然義之君とだね。」アイシアは当然のように言うが、
「いや、ペアはくじ引きで決める。」
「そんなー」アイシアは残念そうに言う。義之は苦笑いだ。
「では始めるぞ。紙に1～4までの数字が書かれている。同じ番号の者がペアだ。」
アイシアはやる気まんまんだ。
渉も「女の子　女の子　女子ィ！」と必死に祈ったいた。
そんな渉を杏と茜は冷ややかな目で見ている。
いよいよくじ引きだ。みんな一斉にくじを引く。「3番誰？」とアイシアが言う。
「あっオレだ。」その声は義之だった。
「やったね義之君。愛の力だね。」そう言って義之にアイシアが抱きつく。
「バカップルね。」杏が言う。
「だね～。」茜が同調する。ななかは苦笑いだ。
「3番。」杏が小さな声で言うと、
「杏ちゃん　私とだね。」茜が言う。

「4番って誰だ？！」
「フフフ、オレだ。板橋よ。」杉並がそう言うと渉は崩れ落ちる。かなりショックだったようだ。
「じゃあ残りは私たちだね。宜しくね。五代君。」ななかは笑顔で言う。「ああ宜しく。」優も笑顔で返す。
ペアは　優、ななか
　　義之、アイシア　　杏、茜
　渉、杉並

となった。
「まず最初は白河嬢と五代だ。」
「白河さん気をつけてね。優君に襲われそうになったら声あげるんだよ。」茜がからかうような目で言う。
「うん。気をつけるね。」ななかもそれに乗った。
「そんなことしないっての。」優が肩を落としてそう言うと、義之が肩に手を置いてくる。
慰めてくれているのだろう。優は義之に少し親しみを感じた。
優とななかは出発した。辺りは暗闇に包まれ、かなり不気味だった。何か出そうな感じすらする。

そんな中ななかが口を開く。
「五代君はあの事件のこと信じる？」
「うん。何もなかったとは思えないよ。」優はまるで何も知らないかのように答えた。
「じゃあ、蜘の怪人を倒した赤い戦士の話は知ってる？」
「知ってるよ。みんなの噂になってるしね。」
「私ね、あの事件の前にもあの人に助けてもらったんだけど、あの時は私酷いことしちゃって…」「大丈夫。」優はサムズアップをしてななかに言う。
「その後もみんなを助けてくれたんでしょ。きっとその人は気にしてないよ。」なんだか優は嬉しかった。自分のことを認めてくれているのだ。化け物ではなく、人として。
「ありがとう。五代君って優しいんだね。」なながそう言うと、優は少し照れた。

やっと教会が見えてきた。建物には蔦が絡みつき、ところどころ壁にヒビが入っている。
２人はドアを開け中に入ると、中には沢山の蝋燭が置かれていたた

め、思ったより明るかった。
杉並が置いたのだろう。2人でコインを探していると、突然グロンギサーチャーが反応した。
優はななかに黒い何かが近づいているのに気づいた。
「白河さん！離れて。」優はななかの方に走って行き、ななかを後ろに下がらせる。
すると、黒い何かの正体が分かった。
やはりグロンギだ。
コウモリのような顔を持ち、手には羽がついている。
「きゃー」ななかは悲鳴をあげて腰を抜かしてしまう。
優はコウモリの怪人に殴りかかって行く。ななかが見ている前で変身するわけにはいかないからだ。アマダムの力で優の体は変身しなくても強化されているが、怪人には到底かなわない。
「早く逃げて！」
「私腰が抜けちゃって、五代君、怖いよ。」
「どうしたらいい。」
優は焦っていた。

「さっき悲鳴が聞こえなかったか？」義之が杉並に尋ねる。
「何かあったのかもしれないな。オレが見てこよう。桜内はみんなといっしょにここに残れ。」
杉並は義之にそう言って教会の方に走って行く。

優は防戦一方だった。もし、反撃すればもっと強烈な一撃をくらってしまう。
そんな中優はコウモリの怪人に首を捕まれ、入り口の方に投げ飛ばされてしまう。

「五代君！」ななかが叫ぶ。倒れて起き上がろうとする優にコウモリの怪人は襲いかかっていく。その時、突然ドアが開き、懐中電灯を持った杉並が入ってくる。
「五代、白河　。」
杉並は目の前の光景を見て言葉を失う。
「あれは…」
「杉並、白河を連れて逃げろ。あれはオレがなんとかする。」
「何を言っている。そんなことできるわけなかろう。」
「大丈夫だ。オレはクウガだから。」
再びコウモリの怪人が優に襲いかかってくる。優は腹部に手を起きアークルを出現させ、
「変身」と叫ぶ。
すると、優の姿は一瞬で変わり、クウガマイティーフォームに姿を変える。優は襲いかかってきたコウモリの怪人を力一杯殴りとばす。
それから、杉並の方を向き、「早く行け。」と言った。
杉並は驚いていたが、無言で頷き、同じく驚いているななかに肩をかして教会の外に出て行く。
それを見届けた優はもう一度コウモリの怪人の方に走って行き、起き上がろうとしている怪人の上に馬乗りになって何度も殴りつける。堪らなくなった怪人はなんとか優を突き放し、飛んで逃げようとしたが、優は怪人に向かってジャンプし、地面に引きずり降ろす。
チャンスだと思った優は怪人と距離をとり足に力を込める。右足が熱くなるのを感じた。そのまま走っていき、怪人に渾身の跳び蹴りを放つ。
「おりゃあ」
怪人はドアを破って外に吹っ飛び爆発する。
優は変身を解き、杉並達の後を追った。杉並とななかは道の途中で待っていたのですぐに追いついた。
「五代君！」そう言ってななかが抱きついてくる。
優は少し恥ずかしかったが、まだ怖がっているよいなので抵抗しな

かった。
「あの怪物はどうした？」杉並が言う。
「なんとか倒したよ。」「そうか。詳しいことは後で聞こう。とりあえずオレはみんなをごまかして解散させてくる。お前は白河嬢を送って行ってくれ。
それと、さっきは助かった。感謝する。
さらばだ。」そう言って杉並は去っていった。
その場には優とななかだけが残された。

「これで助けて貰ったのは3回目だね。本当にありがとう。でも、あの時はごめんね。逃げたりしちゃって…」ななかが言った。
「いいんだよ。さっきも言ったけど気にしてないから。それにあれが普通の反応だよ。」と優が言うが、
「でも…」ななかは俯いてしまう。
そんななかを見た優は「オレはみんなの笑顔を守りたいんだ。だからそんな顔しないで笑ってよ。オレは大丈夫だから。」優は笑顔でそう言った。
「やっぱり五代君は優しいんだね。」ななかも笑顔になる。
「えっそうかな？ありがとう。じゃあそろそろ帰ろうか。家に帰ればバイクあるし、乗せてくよ。」
「うん。ありがとう。
そうだ。これからはさ、白河さんじゃなくてななかって呼んでよ。」
「えっ。えっと、ななか。」
「うん。よろしくね。優君。」

第４話（後書き）

次の更新はいつになくなるか分かりませんがよろしくお願いします。

第5話（前書き）

第5話です。

第5話

昼休みになると、優の席に杉並とななかが集まって来た。
朝は茜や杏に「白河さんに何したの？」などと、からかわれ、それどころではなかったからだ。

「昨日のことについてはなしてくれ。」
杉並から口を開く。
ななかも同じ気持ちのようでまっすぐこちらを見てくる。
「分かった。話そう。」優は覚悟を決めた。どういう反応をするか分からないが話すしかないと思ったのだ。
「オレはある人からあの力を託されたんだ。その人にみんなを救えって頼まれたんだ。だからあの化け物と戦ってるんだ。なんであれが現れるようになったか分からないけど…。」
2人とも黙ったままだった。さすがにこんなことを言われても信じられないだろう。そう思ったが、
「そうだったのか。ならオレも協力させて貰おう。」杉並がそう言ったのだ。
「うん。私も。」
ななかもすぐに同意する。
優は呆気に取られた。こんな応えが返ってくるとは思わなかったからだ。「オレに関わらない方がいいぞ。どんな危険なめに遭うかわからない。」「でも優君だけ危険なことさせる訳にはいかないよ。」
ななかがすぐに応える。
「五代、もうオレ達は友達ではないか。困ったときは助け合うのが友情というものだろう。」
杉並が言う。

「ありがとう。2人とも。」

優は嬉しかった。また自分の理解者が増えたのだ。支えてくれる仲間がいれば、戦っていけるような気がした。

「そうと決まれば今日から調査だな。」
杉並が言う。
「私も調べてみるよ。」ななかも言う。
「ああ。」優はサムズアップして応えた。

放課後になった。今教室の中にいるのは優と杉並だけだ。
ななかは部活があるため今はいない。

「調査を始める前に、まず、どうやってあいつらを見つけだすかが問題だ。蜘の怪人のときはどうやって見つけたのだ？あの時はお前はまだここの生徒じゃなかったはずだ。」杉並が言う。
優は携帯電話のようなものを取り出し、
「これを使ったんだ。グロンギサーチャーっていうんだ。これもオレに力を託した人がくれたんだ。」と言った。「グロンギ？あの怪物のことか？」杉並が尋ねる。
「ああ。そうだ。ある程度はそれで分かるんだが、近くじゃないと反応しないんだ。」

「そうか。なら何か調査のための足が必要だな。そう言えばお前バイクを持ってると言ってたな？」

「ああ。あの人から貰ったバイクがあるんだ。」
「ほう。それは興味深いな。今から見に行っても構わないか？」

「ああ構わないよ。」

優は承諾し、杉並と優の家に向かった。
家に着くと、すぐにバイクの方に向かった。
「ほう。これは素晴らしいな。見たことのないタイプだ。」杉並が感心したように言う。
「トライチェイサー２０００Ａっていうんだ。最高時速は３００キロ。メカはよく分からないけどすごいみたいだな。」
「ああこれはかなり凄いな。少し調べさせてくれないか？オレも移動するためのバイクが必要だしな。」
「構わないけど、自分で作るのか？」
「非公式新聞部にメカに強いやつがいてな。なんとかなる。」
「そうか…。」
非公式新聞部っていったいなんなんだろう。優はそう思った。
杉並はメカにも強いようでトライチェイサーを色々調べながら納得している。設定図も書いていく。
そうしているうちに夜になり、杉並は作業を終えた。
「五代、実に素晴らしかったぞ。無公害エンジンに電気信号によって色を変化させるマトリクス機能まであるのだな。」
正直、優は良く分からなかった。
「それはいいとして、夕飯食べてくか？たいしたものは出来ないけ

ど。」
「ありがたいな。いただこう。」
メニューはカレーだった。優自身はそれほどうまいとは思っていなかったが、杉並は絶賛していた。優は前の世界でも1人暮らしだったため、家事がある程度こなせるのだ。夕食を食べた後、満足した様子で杉並は帰って行った。

翌日の放課後、今日はななかも残っている。

杉並が新聞記事を取り出した。
「これを見てくれ。」

その記事は転落事故に関するものだった。
建設中のビルで転落死する人が最近増えているという。しかも、そのほとんどがそのビルに関わりのない人であるため、警察は自殺の線で調査をしており、現在ビルの建設は中断しているらしい。
杉並が口を開く。
「この事件には不審な点が多くある。わざわざ建設中のビルから自殺する人間がこれほどいるのもおかしい。なにより何の痕跡も残っていないというのが前の時と一致している。調べる価値はありそうだ。」

「そうだな。行ってみよう。」

「うん。今日は私も行くよ。人数が多い方がいいしね。」

それから建設現場に3人で向かった。

現場に着き、周りの様子を見たり、周辺に聞き込みをしてみたが、

情報は得られなかった。
人通りが少ない場所なのもあるが、あまりにも少なかった。
そうしていると、突然グロンギサーチャーが反応する。
すると3人の目の前にバッタのような怪人が現れる。
優は2人を庇うように前に進み、アークルを出現させ、叫ぶ。

「変身。」

優の姿は変わり、クウガマイティーフォームに姿を変える。

「優君頑張って。」

心配そうにそう言うななかに優はサムズアップをして怪人に向かって行く。

優が先制し、パンチを決めようとするが、敵はそれをあっさりかわし、ビルの屋上まで高くジャンプする。
自分のジャンプ力では届かないと思った優は少しずつジャンプして登り、屋上を目指す。
やっと屋上に手が届き、優はよじ登ろうとするが、そこにはすでにバッタの怪人が待ち構えており、優は蹴り落とされる。しかし、優は途中の手すりに掴まり、なんとか難を逃れた。

また同じようにやっても駄目だと判断した優は建設用の階段使って登っていく。その途中クウガの体の色が青に変わる。
それに気づいた優は昔見たクウガのことを思い出す。

「そうだ。青は高く跳べるんだ。」
クウガドラゴンフォームは素早さとジャンプ力が強化される。
その力を使い、優は一気に屋上までジャンプする。

屋上に着き、バッタの怪人を見つけた優は一気に距離を詰め、パンチを打ち込んだ。
優は違和感を感じた。いつものような力が出ないのだ。その証拠に怪人はあまりダメージを受けていない。

「力が弱くなってる。青くなったからか。」

優がそう呟くと、怪人は反撃に出てくる。
さっきとは逆の立場となり、怪人が優にパンチを打ち込んでいる。
優怪人に蹴り飛ばされ、体勢を大きく崩す。
怪人は倒れた優の首を掴み、屋上から地面に向けて優を落とした。
そのまま優は真っ逆さまに落ちていき、地面に叩きつけられる。

「五代！」

「優君！」

杉並とななかが叫ぶ。

第5話（後書き）

次回はいつになるか分かりませんがよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3457v/

仮面ライダークウガ in D.C.2

2011年10月9日13時14分発行